

前期：現代キリスト教思想研究1——近代から現代へ

オリエンテーション——現代キリスト教思想の諸動向

1. 西欧近代とキリスト教
2. 自由主義神学1——シュライアマハー
3. 自由主義神学2——リッチュルとハルナック
4. 自由主義神学3——トレルチ
5. ヘーゲルとヘーゲル主義 5/23
6. 近代聖書学と宗教史学派 5/30
7. キリスト教と社会主義 6/6
8. 弁証法神学1——バルト 6/13
9. 弁証法神学2——ブルトマン 6/20
10. 弁証法神学3——ティリッヒ 6/27
11. 解釈学的神学とブルトマン学派 7/4
12. 研究発表 7/11
13. 研究発表 7/18
14. 研究発表 7/25

<前回>リッチュル・ハルナック

(1) 自由主義神学とは何か

1. Liberal Protestantism

A movement which became of particular significance in nineteenth-century Europe and North America, stressing the importance of the religious personality of Jesus, and committed to an optimistic view of human nature and an evolutionary understanding of the nature of cultural development. (p.320)

(2) リッチュルとその学派

2. 大木英夫『終末論』

・「選ばれた者たちを、最高善と見なす神の国」「へとはいらしめるよう教育すること」、「神の国」「愛の動機にもとづく行為による人類の有機的結合」、「最大のひろがり[国民]的差別を越えた」と、最も包括的な動機[愛]という二つの道德性の共同体」は「神の国として把握され得る」(125)、「神が人間に実現したもう最高善であり、同時に人間の協同の課題である」、「神の国」の概念は、巧妙に道德性と結び合わされ、近代世界に有効なものとして化せられた、「リッチュルの「神の国」の概念の倫理化は、決して個人化や内面化ではない」、「社会的要素」はたくみに保存されている。それは人間が共同して達成すべき理想的な社会状態と考えられているからである」(126)

3. 森田雄三郎『キリスト教の近代性』第四章

・「イエスの人格」「このイエスの歴史的人格的啓示を通してのみ、信仰者は神との有意義な交わりを持つことができる」、「イエスを通しての有意義な交わり」、「イエスは歴史学的対象であると同時に、認識主体に関わる歴史的対象でもある」、「歴史的」とは、時間的現象的過去の事実を指すと同時に、この事実の「価値」をも意味する、「価値認識は「交わり」にもとづく」(166)、「組織神学は、価値判断によって全体的意味連関を認識する」(167)、「教会は「義認と和解」によって「イエスとの交わり」もしくは「神との交わり」に立っている。この交わりにおいて、キリスト教的価値を「教会の根源的意識」に相応して自覚することが、組織神学の課題となる」(167)、「「交わり」と価値の自覚」(168)・「「教会の根源的意識」に即応した「交わり」とその価値の自覚は、リッチュルでは「目

論的」と呼ばれる、「神の究極目標が神の国において具現されている」、「リッチュルによれば、シュライエルマッハーが神の国とイエスの贖罪をキリスト教理解の二つの中心点としたことはたしかに正しい」(169)、「楕円二焦点的＝目的論がリッチュルの本来的意図なのである」(171)

(3) ハルナック

3. ハルナック『基督教の本質』(Das Wesen des Christentums, 1900)

4. 抜粋・引用 (山谷省吾訳、岩波文庫)

「その死亡証明書を既に示すことが出来ると信ぜられている宗教を更に知ることは、我々の要求でなければならない。然し、事実上今日此宗教並びにその為めの努力は、以前よりも活気を加えている」(24)

「基督教とは何か」「歴史学的方法により、且つ体験された歴史から得られた生活経験に基づいて、答えようと思う。従って弁証論的並びに宗教哲学的の考察は、之を除外しよう」(25)、「我々の課題は依然、基督教とは何かと云う純歴史的題目である」、「我々は何処に資料を求むべきか。イエス・キリストと彼の福音と云う簡単で十分な答えで、尽きている様に思われる」、「各々の偉大な、力ある人格は、その本質の一部分を、彼が働きかけた人々において初めて現わすからである」「現象中の重要なものを捉え」(31)

「彼の時代に立っていた」(31)、「又は歴史的に変化する諸種の形式の中に常住的なものを含んでいる、とするかである」(32)

「奇蹟的なもの、凡ての奇蹟の記事は、之をどう処理するか」(42)

4. 自由主義神学 3 —— トレルチ

・トレルチ (Ernst Troeltsch, 1865-1923)。ドイツのプロテスタント神学者、宗教哲学者。1892年からボン大学、1894年からハイデルベルク大学で組織神学の教授。1915年からはベルリン大学で哲学の教授。

(1) リッチュル学派からの離脱

1. リッチュル批判

・「A・リッチュルから学んだこと」：「教義的伝承の判明な把握」「近代の精神的宗教的状況の同様に判明な把握」(森田、219)

「トレルチは、リッチュルにおけるこの二つの要素の統一にたいして疑念をさしはらむ」

「一つは、リッチュルの宗教的認識の立場に対してであり、今一つはその歴史概念に対して」(佐藤、166) → (2) (3)

↓

2. 基本的課題「近代世界をいっそう率直に検討することによってキリスト教的理念世界を徹底的に思惟し、明確に系統的に述べること」

「キリスト教的理念と近代世界との関係が倫理的次元の問題に深く根ざしていることを見いだした」(219)

「実践としての倫理的領域のなかでも、とりわけ社会倫理の領域において、トレルチは教義的伝承と近代世界との対立葛藤が現われることを看取する」、「社会集団の宗教的実践として理解され答えられるべきである」(220)

3. 『社会教説』(Die Soziallehren der christliche Kirchen und Gruppen, 1912)

福音→各時代における国家、経済、家族、社会などをめぐる諸教説

諸類型 (理念型) : 教会 (Kirche)、分派 (Sekte)、神秘主義 (Mystik)

4. 「伝統との連関を保ちつつ新しい時代において新しい総合を創造する「精神力」の連続性としてのエトス」は「まず社会関係である」(228)

5. キリスト教の本質

『＜キリスト教の本質＞とは何か』（1903） cf. ハルナックとその教理史

批判としての本質、発展としての本質、理想としての本質（本質規定とは本質形成である）

「本質とは直観的な抽象であり、宗教的・倫理的な批判であり、活動的な発展概念であり、そして未来を形成し新たに結ぶ仕事を据える理想なのである。」（2, 98）

6. 近代プロテスタンティズムの区分

古プロテスタンティズム、新プロテスタンティズム

（2）宗教史学派の神学

7. 「神学における教義学的方法と歴史学的方法について」(Über historische und dogmatische Methode in der Theologie, 1900)

「教会的な神学から自由な宗教哲学に正しく基礎づけられたキリスト教神学」、「教会的な伝統から全く自由な立場において近代的な学問意識において正しく位置づけられた神学」の構想（佐藤、169）

「伝統的な教義学から決定的に彼を決別させたものは、近代的歴史意識とそれに伴う歴史学である」(169)

シュライアマハー（Dogmatik から Glaubenslehre へ）、リッチェルの線上。

8. 歴史的方法の特徴：方法、認識、存在、歴史主義

- ・ 批判 (Kritik) ・ 類推 (Analogie) ・ 相互作用 (Wechselwirkung) あるいは 相関 (Korrelation)
- 「キリスト教をも含む宗教史全体の包括的連関の中にキリスト教は置かれねばならず、キリスト教に関する評価も全体的連関からなされねばならない」(171)

9. 「宗教史学派の教義学」(Die Dogmatik der "religionsgeschichtliche Schule", 1913)

- ・ 二つの研究方向

1) キリスト教の純粋に歴史的研究 2) それに基づいたキリスト教の妥当性

- ・ 教義学の4つの課題

1) 諸宗教との比較を通じたキリスト教の最高の妥当性の証明

2) キリスト教（歴史的連関において成立し様々な要素を摂取し発展してきた歴史的複合体）の本質が何を意味するか。

3) キリスト教の本質の叙述（＝狭義の教義学）

神、世界、人間、神の国、永生などの諸表象を含む

4) 教義学は学問的知識や方法を前提とするが、それ自体は、一種の信仰告白であり、説教や宗教教育の手引きである。実践に関わる。それ自体は近代的な学問ではない。

↓

伝統的な教義学の解体、『信仰論』

（3）カント的な宗教哲学の構想

10. 心理学と認識論 → カントの批判哲学による解決

経験から経験のア・プリオリな条件へ、実証主義的宗教心理学への批判

「心理学的なものの中に含まれる理性が自己の活動を通じて自己自身を認識するという仕方です」「認識論的な循環」→「無限に繰り返されるべき課題」(177)

「ア・プリオリな基本概念」は「不断に成長」「自己修正的」

11. カント主義の拡張 cf. 波多野

認識論のみがア・プリオリではない。精神活動の諸領域のア・プリオリな構造。

宗教的アプリオリ、この宗教的アプリオリが現実化する（心的現象）

↓

cf. ユングの元型（林道義）

12. 宗教の本質：

- ・ 宗教現象の心理学的認識を可能にする普遍概念・類概念（宗教心理学）
- ・ 宗教の真理内容（宗教認識論）、事実に対する価値、宗教的アプリオリ
- ・ 歴史上の諸宗教の段階的な評価、宗教の理想への適用、歴史を貫いて遂行される真理内容の内的運動（宗教の歴史哲学）
- ・ 生全体の中での意味、最も普遍的で原理的な世界知と宗教の主張する実在（神）との関係（宗教の形而上学）

（4）歴史主義の諸問題

13. 歴史主義と歴史相対主義

近代＝実在・現実の歴史化（大木英夫『新しい共同体の倫理〈編 上下〉』教文館）
歴史の多義性

↓

14. キリスト教の絶対性（普遍史）からヨーロッパ的文化総合へ

- ・ 1902: Die Absolutheit des Christentums und die Religionsgeschichte
「救済宗教」「キリスト教は人格主義的な宗教性の最も強力で集中的な啓示」（199）
- ・ 1922: Der Historismus und Seine Probleme、Der Europasmus
- ・ 歴史相対主義はニヒリズムか？ cf. H.R.ニーバー（『啓示の意味』）、パネンベルク

<参考文献>

0. 『歴史主義とその克服』理想社、1956年。
『ルネサンスと宗教改革』岩波文庫、1959年。
『トレルチ著作集』全10巻、ヨルダン社、1980-88年。
 - 1 宗教哲学
 - 2 神学の方法
 - 3 キリスト教倫理
 - 4・5・6 歴史主義とその諸問題
 - 7 キリスト教と社会思想
 - 8・9 プロテスタンティズムと近代世界
 - 10 近代精神の本質

『私の著書』創元社、1982年。『信仰論』教文館、1997年。
『古代キリスト教の社会教説』教文館、1999年。
1. 武藤一雄『神学と宗教哲学の間』創文社、1961年。
2. 熊野義考「トレルチ」（『歴史と現代 上』全集10巻、新教出版社、1981年）。
3. 佐藤敏夫『近代の神学』新教出版社、1964年。
4. 森田雄三郎『キリスト教の近代性』創文社、1972年。
5. 大林浩『トレルチと現代神学』日本基督教団出版局、1972年、『アガペーと歴史的
精神』日本基督教団出版局、1981年。
6. 柳父圀近『ウェーバーとトレルチ—宗教と支配についての論—』みすず書房、1983年。
7. 安酸敏眞 Ernst Troeltsch. *Systematic Theologian of Radical Historicity*, Atlanta: Scholars Press, 1986.、『歴史と探求——レッシング・トレルチ・ニーバー』聖学院大学出版会、2001年。
8. H.E.テート『ハイデルベルクにおけるウェーバーとトレルチ』創文社、1988年(1985)。
9. 近藤勝彦『トレルチ研究』上下、教文館、1996年。
10. 佐藤真一『トレルチとその時代』創文社、1997年。
11. F.W.グラーフ『ヴェーバー・トレルチ・イエリネック——ハイデルベルクにおけるアングリカン研究の伝統』、『トレルチとドイツ文化プロテスタンティズム』聖学院大学出版会、2001年。